

游俠奇談

子母澤寬

桃源社刊

【検印省略】

游俠奇談	定價 九五〇円
著者 子母沢 寛	
昭和四十六年八月五日 印刷	
昭和四十六年八月十日 発行	
発行者 矢貴昇司	
印刷所 堀内印刷	
発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目 十二番地 株式会社 桃源社	

俠客けふかくの話はなし、古来里人こらいりじんの胸むねから胸むねに残のこされて、伝説口碑でんせつこうひに聞きくべきものは多いけれども、さてこれを文書ぶんしょに求もとめて噓実きよじつを確たしかめんとすれば、その証拠しやうこの余あまりにも少すくないのに困こまらせられる。しかし少すくなきもよし、また多おほきもよろし。即ち俠客けふかくの話はなしは、語かたつて面白おもしろく、聴きいて面白おもしろければそれでよろしいのである。

本書ほんしょ収おさむるところの外ほか、大前田英五郎おほまへだえい ちやう、高萩たかはぎの鶴屋萬次郎つるや まんじ ちやう、甲州こうしう津向つむぎの文吉ぶんきち、武居たけみの安五郎やす らう、館林たてばやしの虎五郎とら らう、逸見へみの貞蔵ていざう、三河屋みかはや幸三郎こうざぶらう、由比ゆひの大熊おほくま、小田原をだ はらと、屋やの常蔵つねざう、美濃合渡みのごうどの政右衛門まさ せいもん、板橋いたばし在江古田ざいこだの幸平こうへい、品川宿しながはじゆくの四文安もんやす、武州小金井ぶしうこ かねいの関小次郎せきこ じちやう、

兄弟分江戸の新門辰五郎、新場の小安、会津の小鉄など、書きた
い俠客は尚ほ多くあるが、これは近く機会を得て書く。

一口に俠客といつても、長脇差と云はねばうつらぬものもあり、
渡世人といはねばどうもその人の姿の出ないものもある。長脇差
は江戸を中心の街道筋に多く、渡世人は一寸横道に入つて、上総
下総あの辺の本当のばくち打ちを称したいやうな氣持がする。

昭和五年九月

子母澤 寛

目次

飯岡の助五郎

一	背中に十文字の傷痕	二
二	一本差しにおかいこぐるみ	三
三	近国近在相撲世話人	六
四	賭場荒らし覚え帳	九
五	助五郎一世一代晴れの口上	三
六	十八も若い笹川の繁蔵	三
七	助五郎闊討に逢う	五
八	国定忠治政吉を罵る	六
九	笹川なぐり込み	三
一〇	八州廻り桑山の旦那	三
一一	永井の政吉船中に死す	五
一二	助五郎仮入牢仰付けらる	七
一三	遠山景元軽く裁く	五
一四	繁蔵はそのまま逃亡	七
一五	譲りもの「朱房の十手」	五
	笹川の繁蔵	六
一	愛妾お豊	三

佐原の喜三郎

二	かますへ入った首のない死骸	一〇五
三	自殺した美人の妹おふち	一〇六
四	色の白い角張った顔	一〇七
五	無宿浪人平田深喜来る	一〇八
六	いわゆる平手造酒の本当の話	一〇九
七	天保十三年笹川の大花会	一一〇
八	いよいよ始まった	一一一
九	徹夜して待つ繁蔵の身内	一一二
一〇	切られの清右衛門「鉄砲鉄砲」と叫ぶ	一一三
一一	十一ヶ所斬られた平田深喜	一一四
一二	びやく橋大榎下の悲劇	一一五
一三	勢力富五郎の鉄砲腹	一一六
一四	堅気から見た繁蔵助五郎	一一七
一五	喜三郎こと江戸に而死、骨来る	一一八
一六	芝山の仁三郎を殺ろす	一一九
一七	喜三郎御用弁	一二〇
一八	婦女誘拐の罪	一二一
一九	情あふるる父の武右衛門	一二二
二〇	喜三郎御牢内の自筆	一二三
二一	遠島の御方は心得なされべく候	一二四
二二	御用船の牢内三尺四方の話	一二五
二三	泊島から三宅島まで	一二六

国定忠治

一〇	天保七年頃の三宅島	三
一一	従是八丈行之様躰を記す	三三
一二	八丈島村並言葉異成ヲ記ス	三五
一三	八丈の島抜け	三〇
一四	偽船頭上総無宿の久兵衛	三三
一五	喜三郎再び御用弁	三四
一六	十六の花嫁お滝	三七
一七	御用聞き岡芳	三九
一八	御牢内の記	四〇
一九	喜三郎牢を出る	四三
二〇	山田浅右衛門の片手斬	四八
一	本妻お鶴、妾お町お徳	五七
二	勤王の志士大谷刑部	五九
三	身内三百五十人	六一
四	田崎草雲と忠治	六二
五	土産の生首	六四
六	島村の伊三郎斬り	六六
七	信州賭場荒し	六七
八	第一回赤城籠り	六八
九	砂まみれの千うどん	六九
一〇	玉村の京蔵と主馬	七一
一一	大戸の関所を破る	七三

相模屋政五郎

一	一人に付米三升と錢二百文	一七二
二	田部井村の磯沼	一七三
三	実説山形屋藤藏のこと	一七五
四	今様鬼退治	一七六
五	文蔵梟首、才市打首	一八〇
六	忠治赤城を去る	一八一
七	利根川べりの仕返し	一八三
八	浅次の伯父勘助	一八四
九	熊の皮を敷いて首実検	一八六
一〇	忠治憤然として第三回の赤城入	一八八
一一	忠治発病	一九〇
一二	大前田の手紙	一九一
一三	忠治御用弁となる	一九三
一四	大戸刑場の磔刑	一九三
一五	忠治の首と腕	一九〇
一六	江戸の相政	二〇五
一七	帶刀御免拾人扶持	二〇七
一八	乾兒千三百人	二〇九
一九	小指が無かった相政	二二三
二〇	目に余った公儀の歩兵	二二三
二一	与力下村弥助殺さる	二三五
二二	病身の総領千之助	二六六

清水の次郎長……………二九

一 次郎長の剣法……………三三

二 最初の旅……………三三

三 晩年の次郎長……………三四

四 豪い奴ア新門辰五郎だ……………三六

五 俠客次郎長之墓……………三九

六 遠州森の五郎……………四〇

七 秋葉山の高市……………四二

八 清水港へ帰る……………四三

九 和田島、紬の大喧嘩……………四三

一〇 高萩までの裸道中……………四五

一一 百叩き……………四七

一二 大政 小政 仙右衛門……………四八

遊 俠 譚……………五九

俠 者 物 語……………四二

俗 の 記……………四七

刺 青……………四七

武居の吃安……………五一

資料提供

井上敬二
八木 昇

游俠奇談

飯岡の助五郎

一 背中に十文字の傷痕

飯岡の助五郎は、目玉のぎょろりとした角張った顔であった。丈は五尺六七寸。ひとところ江戸相撲友綱良助の弟子となり、綱ヶ崎と呼んで、回向院くわういんの土俵の砂をつかんだことがあるだけに、でっぷりと肥っていて、両肩などは晩年まで、盛り上がるようになっていた。

清郷村岩井不動の縁日の夜、同国須賀山村、笹川繁藏身内の闇討に逢って、田畝の中へ斬込まれた時の、大きな十文字の傷痕が背中にあって、老年になってから夏になると、ひどくこれを搔ゆがった。よく往来へ縁台を持出しては、白い下帯をぐるぐる腹へ巻き上げただけで、真っ裸で、打扇うちあふを使っていたが、その辺の子供を捕えては、

「じいちゃんの背中を搔いてくれろ」

といって、いやになる迄、爪で引むくようにして、その傷痕をかかせた。

ことし（昭和五年一月）八十一歳で達者でいる飯岡の浜世話人石井惣助老人など、その頃、七つ八つでよく搔かされたものであった。

*

助五郎は、その頃の渡世人にはめずらしく、安政六年四月十四日、六十八歳まで長命して、町の川端というところにあった自分の賭場で乾児こぶんに守られながら、らくらくと大往生を遂げた。

戒名は発信院断流居士。浄土真宗の光台寺というへ埋葬したが、過去帳には特に、その戒名の左側

に、

「右別之願ヒニ依テ 川端丁三浦屋助五郎事」

とある。

光台寺では、寺の総代世話人の外は院号を用いなかった。助五郎身内は、親分の格式を保つために、特にそれを頼んだものである。三浦屋は助五郎の屋号である。

※

助五郎は本姓を石渡といった。

三浦郡公郷村山崎、つまり横須賀から浦賀へ行く街道の小さな漁村で生れた。家名を代々次郎助、半農半漁の、貧しい小前である。

一度江戸へ出て相撲になったが番附へ名が載るところ迄は行かず、上総国佐久田村へ落ち、ここで雇漁夫となったが、文化七八年の頃、助五郎は二十歳前後で、仲間と共に、また一漁夫として、下総国海上郡飯岡へ出稼ぎにやって来た。その頃の飯岡は今と違って、鰹と鰯の豊漁地として、ひどく盛ったものである。

網元半兵衛というに雇われて、その家に多くの若い漁夫と共に雑居したが、どうせは暴れものの寄り合である、ばくちはやる、喧嘩はする、それに板子一枚下は地獄の漁夫氣質、その中であって助五郎は第一力は強し、小才は利く、それに上総にいる頃鯨を生捕りにしたなどという話さえある位の生命知らずと来ているので、自然仲間へ幅が利く。いつとはなしに、漁師仲間の兄哥となり、船頭となり、年と共に親分らしい貫禄にもなった。